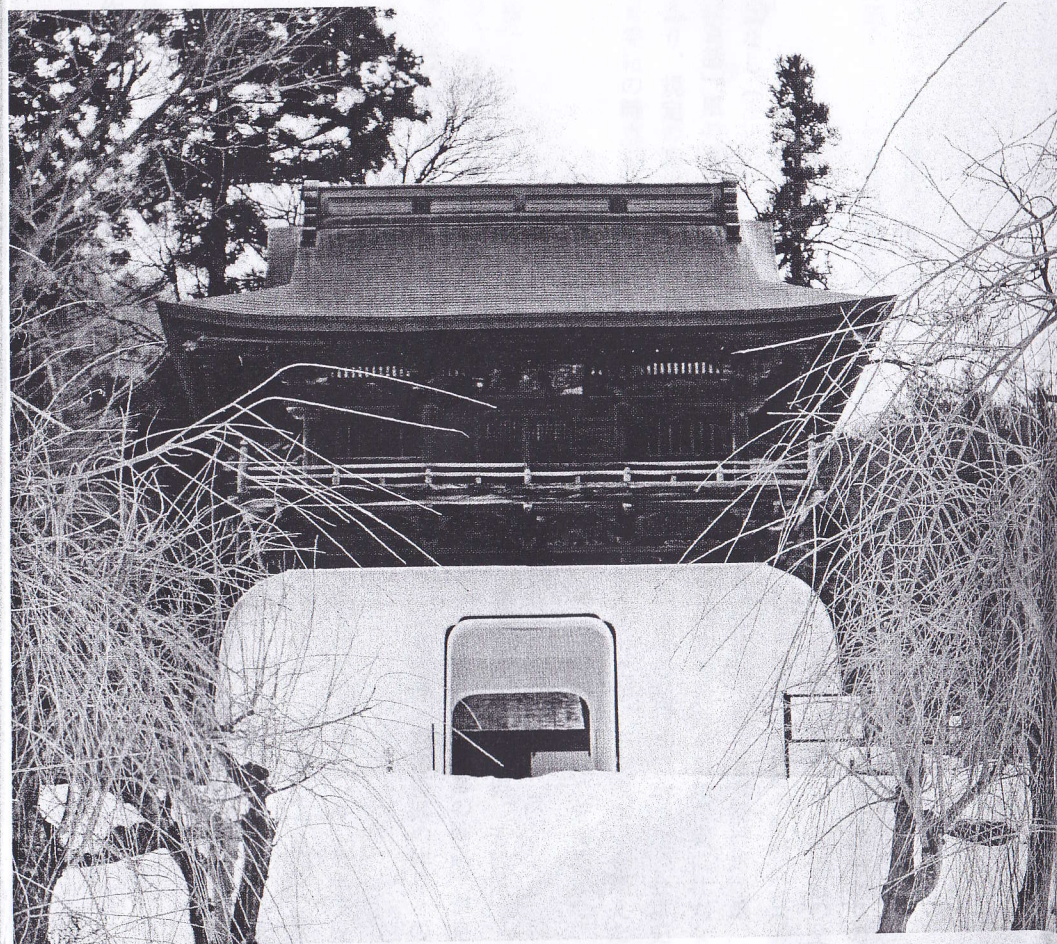


会津史談

平成 29 年 (2017)

昭和六年創刊 第91号



会津史談会

会津と白虎隊

一 はじめに

白虎隊が飯盛山で自刃したのは今から一四九年前で、まもなく一五〇年を迎える。

筆者は、その中で唯一生き残った白虎隊士飯沼貞吉の孫に当たる。

飯沼家では、白虎隊の話は口外してはならないタブーとされたため、筆者も関心が薄いまま年を重ねた。

飯沼貞吉は「自刃失敗を恥じて生涯寡黙を通し、会津には一度も戻らなかった」という通説も、そんなものかと思っていた。

ところが、ある事件をきっかけに、白虎隊の調査を始めたところ、『白虎隊顛末記』という二十ページの自筆の手記を発見し(文献1)、新聞社等の取材記録が残っていることが

分かり(文献2、3)、会津を訪ねている(文献4)ことも判明した。

宮崎十三八氏は、『札幌にいた白虎隊士』(文献5)の序文で、次のように述べている。

飯沼貞吉の生涯は文字どおり波乱万丈で、数奇な運命を背負っていたが、後世の吾人に与えてくれた素晴らしい功績が少なくとも二つある。

その一つは、白虎隊自刃から一人生き残って、その事実を正確に世に伝えてくれたことである。

生き残ったことを評価していただけたことは、子孫として有難いことであるが、筆者の調査によれば、まだ、「事実を正確に世に伝えた」とは言い難く、伝えるべき重要な事実が残されていると考えている。

飯沼 一元

(東京都世田谷区在住)

白虎隊自刃の図の研究に詳しい川延安直氏はその小論文『初期白虎隊自刃の図について』（文献6）の中で次のように述べている。

白虎隊自刃の解釈は、それを語る者の数だけあることになる。・中略・白虎隊を自刃に至らしめた理由も自明のことではなく、真の理由は、当人たちにしか分からない永遠の謎に属するものであることを確認しておきたい。

貞吉は「当人たち」の一人で、且つ、唯一の生残りである。そして、彼は手記と絵画を残した。これらが、「永遠の謎」を解明する手がかりを与えたことになる。本文では、「会津にとって白虎隊とは何か」を筆者の二十五年間の白虎隊研究の総括としてまとめてみたい。

二 会津における白虎隊の意義

会津にとって、白虎隊は鶴ヶ城と双壁をなす宝物ではないかと思う。

悲劇物語としての高い知名度は観光資源として十分な価値を発揮してきたといえよう。筆者の疑問は、白虎隊は「お涙頂戴の客寄せ道具で良いのか？」ということである。

勇敢に戦わない事は孝行ではない。勇敢でないという事は、君恩を忘れ、義を重んじる事無く、命を惜しむ事であり、それは未練から起こるものである。

死すべき義に当った時に死ななければ、汚名を永遠に残す事になり、人に爪弾きされてせしられ、両親までもが辱められ、生き甲斐さえも無くなってしまうだろう

このように会津藩では、家訓・什の掟・日新館童子訓という会津武士道を形成する三本柱を通じて「危難に臨んでは節に死す臣の道なり」の精神、義の心が養われたといえる。それは男のみならず女にも伝わり、非常時の心構えとして「死への覚悟」が醸成されていた。

これらを背景に考えれば、白虎隊の自刃は会津武士道で培われた「義」を貫いた結果とする方が素直であろう。少年たちが「城が落ちた」と誤認して自刃したというお涙頂戴物語で片付けたのでは、白虎隊士に極めて失礼なばかりでなく、会津が培った至誠貫徹の価値を損なうことになると考える。

三 白虎隊自刃の真相

会津藩が降伏し、鶴ヶ城を開城したのは、白虎隊自刃の1か月後である。

會津藩教育考（文献7）という本の緒言にはこう記されている。

「至誠貫天」——これが会津藩の全体を貫く規範であった。会津藩教育の淵源は既に藩祖時代に発し歴代益々文武を奨励して、子弟を教育した結果、幕末にはよく力を王事に尽くし、かつ宗家のために藩国を犠牲にするを惜しまず、特に白虎隊殉国のごとき、婦人殉節のごとき、壮烈極る事績を世に残すに至れり

会津藩の精神教育は儒教を基本とした。藩士の子弟は六歳になると什と呼ばれる仲間に入る。集団生活のなかで「什の掟」を守りながら遊び、十歳になると藩校日新館で「童子訓」を叩きこまれた。

日新館童子訓は三十一条から成り、毎月一回生徒全員を集めて訓話が繰り返された。

その第二十条には、死の美学を謳った。

自分自身の身体は、両親から伝え残された大切な賜であるから自分自身のものであって自分自身のものではない。誰もいない時にも心を正しく、良心に恥じない様に努め、道に背いた行いや不届きな行為はしてはいけない。戦場にある時、

辞書で白虎隊を引くと、広辞苑では

一九人の少年は城陥ると即断して城外の飯盛山で自刃した。

小学館の国語大辞典では、

戊辰戦争で飯盛山まで後退。城が火煙に包まれているのを望見して、全員自刃した。

となっている。

その他の辞典も似たような表現であり、いずれも、「落城誤認説」となっている。

白虎隊自刃の理由は、「お城が燃えている。落城した。殿の後を追おう」というのが通説になっている。この「落城誤認説」には、隊長が不在だったので子供たちが錯覚したのはやむを得ないという補足がつく。研究書にはもちろん、現地の観光ガイドもそう説明している。

筆者は「落城誤認説」を世に広めたのは白虎隊唱歌であると考えている。日露戦争の末期、兵士不足に悩む日本は、挙国一致の戦時体制を構築する必要があった。死を恐れない殉国精神を植え付けるために政府が目付けたのは、白虎隊だった。白虎隊の歌が文部省唱歌として制定され、国史教科書にも取り入れられ、全国に喧伝された。

一番 霞の如く乱れくる 敵の弾丸引き受けて 命を塵とたたかいし 三十七の勇少年 これぞ会津の落城

(*)に その名聞えし 白虎隊
三番 残るは僅かに十六士 一度後に立ちかえり 主君の
最後に会わばやと 飯盛山によじ登り 見れば早く
も城落ちて(*) 焔は天を焦がしたり

筆者はずっとこの説に疑問を抱いてきた。死ぬことはそう簡単ではない。退却した白虎隊士の中には酒井峰治や原田隊など途中で自刃しようとした者が何人かいたが、結局は城に戻っている。十六人もの血気盛んな少年が一糸乱れずに自刃したのは、全員が心底納得できるだけの理由があったはずである。

真相を知るのには生き残った貞吉だけである。彼は『白虎隊顛末略記』以下『顛末記』と略記する)に自刃の理由を「武士の本分を明らかにする」ためとしつかり書きとめていた。『顛末記』は真雄が残した自筆文書で、平成二十年(二〇〇八)に那須塩原市の飯沼本家で発見された(文献1)。

自刃は武士に許された意思表示の儀式である。つまり、抗議のデモンストレーションなのだ。筆者は、至誠を尽くした会津藩が朝敵とされた理不尽に対する抗議を集団自刃という形で示したものと考えている。

「落城誤認説」は彼らを子供扱いし、「お涙頂戴物語」にして観光に利用し、一方、国家は彼らを「皇国の犠牲の鑑」と

のの如し。今や満目の有様、かくの如し。血気の少年、ここにはじめて悄然たり。

城下は炎に包まれていた。敵に激しく攻撃されていた。加えて、飯盛山からは夥しい数の敵兵が続々と城を目指して行軍していく様子がはつきり見て取れた。

これまでは、山中の間道を抜けたり、道に迷ったりして、周囲の状況などを知ることが出来なかったが、飯盛山に登って彼らははじめて戦況の現実を知った。

飯盛山は普段から、彼等の遊び場だった(文献3)。ここから若松城までは約3km、城下を一望することが出来る。そこで、彼らが見た光景は想像を超えた惨状だった。

シヨックが大きかったことは、「血気の少年、ここにはじめて悄然たり」の一文からよく理解できる。

自刃之事

ここに一同足を停めて議す。野村駒四郎、進みて曰く、今や満目の有様かくの如し。臣士に分君に尽くすは正にこの秋なり。寧ろ今行進する滝沢街道の敵軍を衝き、斃て後に止んと。

野村駒四郎は剣と槍の腕前では隊士中随一である。彼がま

して戦争に利用した。白虎隊を観光に利用するのは良いが、彼らの子供扱いにすることは、侮辱である。また、彼らは特攻隊ではないし、皇国の犠牲になった訳でもない。
ネットの書き込みでは、赤穂浪士と白虎隊の自刃の比較も掲載されている。

赤穂浪士は目的を遂げ、幕府が切腹を命じそれに肅々と従う武士道でした。

白虎隊士は城が落ちたという早とちり、若気の至りが原因で犬死にただけ。

泉下の白虎隊士は、百年以上にも亘って彼らの真意が歪曲されたまま喧伝されてきたことをどう思っているのだろうか？ 筆者は胸が詰る。この誤解を解くのは、生残った白虎隊士の血筋を引く筆者の使命である。

以下、『顛末記』を手がかりに自刃の状況を検証してみる。

飯盛山へ登ること

南、若松城を望めば、炎焔は天に漲り、砲声は地に轟く。

北、滝沢街道を看れば、敵兵の行進するその数幾許なるを知らず。西、天神口を顧れば、闇として未だ敵兵の掠めさるも

如レ今や満目ノ有様斯ノ如シ血氣ノ少年ニシテ
自刃之事
新テ果ツヘキニアラサレハ南外行ク日トナ
議ス野村駒四郎進テ曰ク今や満目ノ有様斯ノ
如シ臣士ノ分君ニ盡スハ正ニ此ノ秋ナリ寧ロ
今行進スル滝沢街道ノ敵軍ヲ衝キ斃テ後ニ止
ント升澤茂太郎曰ク國ニ報スルノ今日敢テ寸
時ノ命ヲ惜ニアラサレトミ言テ父母ノ物ヲ

ニ腹ヲリ若松城ハ古シ美雄藩主氏御ヲ禁ケル
名城ナリ一朝或多ク兵之ヲ攻ルモ容易ニ取ル
ヲ得スト今や焔ハ天ヲ焦シ砲聲山岳ヲ動ス
沃ビテ城落タルニアラズ將ニ道ヲ南ニ求メ若
松城ニ入ルニ如スト甲斐リ也萬リ敵論以テ之
争フ藤田隊三郎曰ク最早斯クナル上ハ策ノ違
スヘキナレト進撃ノ計城ニ入ル難元ヨリ不可ト
云ニアラサレトモ速ニテ有餘士ヲ能ク為コ
ヘキ河ニアラス誤テ敵ニ槍ニセラレ観目ヲ耻
辱ラ受ル如キ事アラハ止ム君ニ對シテ何カ面

図1 白虎隊顛末記の一部(自刃のこと)

ず真つ先に言った。

「滝沢街道を行軍する敵軍に突入し、玉砕しよう」
しかし、これに異を唱えたのは井深茂太郎だった。井深は名門井深家の出で、隊士随一の英才。白虎隊出陣の建議書を起草したのも彼だ。ソニー創始者の井深大は縁戚に当たる。

井深茂太郎曰く、国に報ずるの今日、敢て寸時の命を惜にあらざれども、曾て父母の物語に聴けり。若松城は古の英雄蒲生氏郷の築ける名城なり。一朝幾多の兵、これを攻るも容易に取るを得ずと。今や焰は天を焦がし、砲声山岳を動かすも、決して城落ちたるにあらず。潜に道を南に求め、若松城に入るに如かずと。

「鶴ヶ城は古の英雄、蒲生氏郷が築いた名城なので容易に落とすことはできないと両親からも聞いている。炎上しているように見えるが、簡単に落ちるはずがない。敵に見つからぬように南下し、入城を目指すべきだ」

甲怒り、乙罵り、激論以てこれ争う。

「どうやって敵に見つからぬように入城するのか？ 辺りは一面敵で一杯なのだぞ」

白虎隊の教導、即ち当今の特務曹長ぐらゐな資格の男に篠田儀三郎という仁がある。この男はなかなか確かな人物であった（文献3）

戸の口原に出陣した時に白虎隊単独行動を提言し隊長の許可を引き出したのも彼である。リーダーとしての資質を備えていたのである。

議論ここに始めて定まり、徐に用意を為し、慶応四戊辰年八月廿三日巳の刻過ぎなりき、従容として一同列座し南方鶴ヶ城に向え遙拝訣別の意を表し、従容として皆自刃したりき。



図2 飯沼貞雄が描かせた白虎隊自刃の図

「さつきも、永瀬がやられたではないか？」
「弾丸は未だ残っている。この弾丸を全部撃ちまくってからも遅くはあるまい」
「玉砕戦法は勇ましく聞こえるが、敵に捕らわれるかも知れんぞ」

喧々諤々の議論が続いた。血気盛んな少年達が、それぞれ、帰城か玉砕かを巡って激論を交わしたのである。

篠田儀三郎曰く、最早斯くなる上は策の講ずべきなし、進撃の計、城に入る謀元より不可と云うにあらざれども、進も十有余士の能く為し得べき所にあらず。誤って敵に擒にせられ縄目の耻辱を受ける如き事あらば、上は君に対して何の面目もある、下は祖先に對し何の申訳がある。如かず、潔きよく茲に自刃し、武士の本分を明にするにありと。

この論争に終止符を打ったのは隊長代行の篠田だった。彼はさすがに冷静だった。議論を二つに集約し、唯一恥辱を受ける怖れのない方法を選び、日新館童子訓で叩き込まれた「死すべき義に当ったときに死して武士の本分を明らかにする」で締めくくった。

貞吉は後に篠田のことを以下のように表現している。

誰も何も言わなかった。議論は収まった。一同、それぞれ、準備についた。

慶応四年八月二十三日、午前十時過ぎであった。

飯沼貞雄（貞吉改め）は出入りの絵師に白虎隊自刃の図を描かせている。貞雄の付記文を以下に示す。

当時二於ケル白虎隊殉難ノ実況ヲ、当地ノ画工ニ口授シ、之ヲ額面ニ画カシメタ
尤是迄世上三石版摺等ノ物ハ多々有之候ヘ共之レハ何レモ真相ヲ得タルモノニハ無之候

これによれば、城下は炎に包まれているが、城は燃えていない。また、隊士の表情に悲痛感はなく、むしろ爽快感がうかがえる。

四 幕末の会津藩と錦旗の捏造

司馬遼太郎は『歴史を紀行する』（文献8）に、会津藩について次のように記している。

会津藩というのは封建時代の日本人がつくりあげた藩というものの中で最高の傑作のように思える。・中略・この藩の藩士秩序そのものが芸術品とすらおもえるほどののである。秩序が文明であるとすれば、この藩の文明度は幕末において最も高かったとも言えるであろう。

彼は会津藩の文明度をこのように評価したあと、京都守護職の受諾について次のように続けている。

幕末、幕府はこの藩を京に常駐させようとした。・一時期ながら京は無警察状態におちいつていた。・家老西郷頼母などは極力幕命を辞退するように申し述べたが、ゆるされず、ついにはうけざるをえなかった。・のちの会津藩の運命と考えあわせるとき、われわれ史書を読む者はこの事を濃厚に記憶してやさしさをもちたねばならない。幕末ぎりぎりの段階において革命勢力の標的にされたこの藩は、みずからこの死地にとびこんだのではなかったのである。

京都守護職を引き受けた会津藩は他のどの藩にも増して、天皇に至誠を尽くした。

その証拠は孝明天皇から頂いた「宸翰」が示している。戊辰戦争が始まり、二月に会津入りした松平容保は、直ち

二 副署の三名の公卿の署名が同一人の筆跡だったことを学習院大学の井上勲教授が証明している（文献10、12）。

また、この時に授けたとされる「錦旗」は、宮廷には存在せず、後に長州で秘密裏に「捏造」されたものである（文献11）。

現在、山口市後河原に「錦旗の御旗製作所跡」という碑が建てられ、観光名所としてのことからして、罪悪感はいくつもあるであろう。

会津ではこんな畏れ多いことは、いついかなる事情があろうとも、考えだにできないだろう。「ならぬことはならぬ」のである。

長州と会津の違いはここにある。

長州は「目的のためには手段を選ばず」であり、やがて「なんでもあり」に拡大し、歯止めがからなくなる。その行く先は、太平洋戦争に繋がったのである。

戊辰戦争において、錦旗は絶大な威力を発揮した。これは、天皇に対する人民の畏敬の念がいかに深いかを物語っている。

それだけに、偽勅の発行や錦旗の捏造などは「不敬」の極であって、決して許されることではない。これが堂々と実行されたことは、我が国の歴史上に消すことのできない汚点を残したことを指摘しておきたい。

に蟄居して、天皇に恭順の意を表した。さらに四月には、仙台・米沢・庄内各藩を通じて降伏嘆願書を提出したが、握りつぶされた。

これに対して、薩長を主体とする新政府軍は、会津を「朝敵・国賊」とし、新式銃とアームストロング砲で武装した三万人の軍隊で会津に攻め込んだのである。

天皇に至誠を尽くした会津が、なぜ朝敵なのか？当時の会津藩の人たちは、この理不尽に唾然としたであろう。

このおぞましいクーデターを仕掛けたのは、岩倉具視と長州一派である。

まずは、慶応二年十二月二十五日の孝明天皇の崩御である。天皇の突然の崩御の裏には毒殺説が色濃く残っている。（文献9）

次は、十四歳の幼帝（後の明治天皇）の名の元に発した松平容保らを誅殺せよという倒幕の密勅である。これは、薩長が画策して、徳川慶喜の大政奉還の前夜、慶応三年（一八六七）十月十三日に出された。大政奉還後では、倒幕の名目を失うため急遽捏造上げたものである。

これが「偽勅」であることは、
一 天皇の御璽がないこと

五 白虎隊が残したもの

宮崎三十八氏は『会津人の書く戊辰戦争』（文献12）に、以下のような一節を記している。

会津戊辰戦役のなかでも、もっとも心をひかれるのは「白虎隊」である。あの十六、七歳の少年の行動は今日から見てもいろいろ批判もあるであろうが、私は、あれは「さむらい」の魂の、日本における最後の花火のような輝かしい最後の「あわれ」である、と思っている。（宇野浩二）

これは、著者宮崎氏に寄せられた手紙の引用であるが、宇野浩二は福岡出身の作家であり、特に会津びいきというわけではない。

「朝敵・国賊」というレッテルを張られて攻撃にさらされた会津藩において、「ならぬことはならぬ」を叩きこまれて育った白虎隊士にとっては、その理不尽さに人一倍敏感だったに違いない。かと言って、彼らの取るべき行動は、藩命に従うこと以外にはない。

立派に戦い、立派に死ぬ。

飯盛山に退却した彼らは、絶望して自刃したのではない。

自刃は武士に許された抗議の意思表示でもある。正に、「死すべき義に当った時の死」に違いない。悉く節を守りて是に自刃し国難に殉じたのである。筆者は、白虎隊が残したものは、武士としての「義」であると考ええる。

六 白虎隊の「義」を後世に伝えるために

冒頭に述べたように、会津にとって、白虎隊は鶴ヶ城と双壁をなす宝物である。

白虎隊の知名度は高く、ブランド価値も高い。これは大変すばらしいことであるが、お涙頂戴の悲劇物語だけでは、勿体ないし、片手落ちである。

白虎隊が残したものは会津武士道としての「義」であることを伝えることができれば、そのブランド価値は倍加すると思う。

「義」は古来から、日本人が大切にしてきた思想であるが、明治以降次第に廃れて、功利主義がはびこってきたように思う。

白虎隊士にとっては、「ならぬことはならぬ」と「義」は同義語である。すなわち、「筋を通した生き方」、「けじめのある生き方」、

「道を外さない生き方」を指しており、人として最も大切なことである。

筆者らは平成二十二年に「白虎隊の会」を設立し、「白虎隊の「義」を後世に」というスローガンのもとに、全国の白虎隊ファンに働きかけて活動を続けている。会員は現在、東京、会津、下関、京都、長崎、仙台、福岡などで合計約一五〇名である。

(一) 白虎隊自刃の地説明板の設置

飯盛山を訪れ、正面に並んでいる白虎隊一九士の墓を参りする人の殆どは、白虎隊悲劇物語を想起すると思われる。次に、正面右手の小道を進むと、「飯沼貞吉の墓」が現れ蘇生者が一人あったことを知る。

更に奥に進むと階段があつて、これを下ると「白虎隊殉難士各霊塔」がある白虎隊自刃の地に出る。そして、鶴ヶ城を望む「少年隊士像」を見て、炎上する城下を見て自刃したという通説に納得し、鶴ヶ城がどこかを確かめて帰路に就く。籠城戦がその後一か月も続いたことや、白虎隊士が自刃した本当の理由については、「落城誤認説」が常識になっているので特に関心を示さない。

(飯沼貞雄書白虎隊頼末記参考)

後、一名が蘇生。その名は飯沼貞吉である。なお、鶴ヶ城開城はその一カ月後であつた。

平成二十三年(二〇一一)九月二十三日

白虎隊の会

そこで、まず、白虎隊自刃のいきさつを解説する説明板を飯盛山白虎隊自刃の地に設置することを企画した。しかし、この地の管理には複数の団体が関与しており、承諾を取りつけるのは簡単ではなかった。それでも、白虎隊の会の趣旨を理解し、協力してくださる方が少しずつ増え、平成二十三年九月に会津若松市長をはじめ関係者のご臨席のもとにこれを除幕することができた。

説明板は縦五五cm×横九三cmで、文面は下記の通りである。

慶応四年(一八六八)八月二十三日(新暦十月八日)、年齢が十六〜十七歳で構成された土中二番隊の白虎隊士は猪苗代から十六橋を越えて進撃した西軍と戸の口原で交戦するも、敵の軍勢力に圧倒されて退き、戸の口洞門をくぐってこの地に至った。

炎上する城下を前に、玉砕か帰城かを巡って、激論を戦わした。敵陣突入を提案する者もいれば、鶴ヶ城が簡単に落城するはずはないとして帰城を主張する者もいた。

しかし、最終的に「誤って敵に捕らえられ屈辱を受けるような事があれば、主君に対して大変申し訳なく、祖先に対しても申し訳ない。この場合は潔きよく自刃し、武士の本分を明らかにすべき」との決断にはじめて、全員が同意し、一同列座し南鶴ヶ城に向って訣別の意を表し、全員が自刃した。

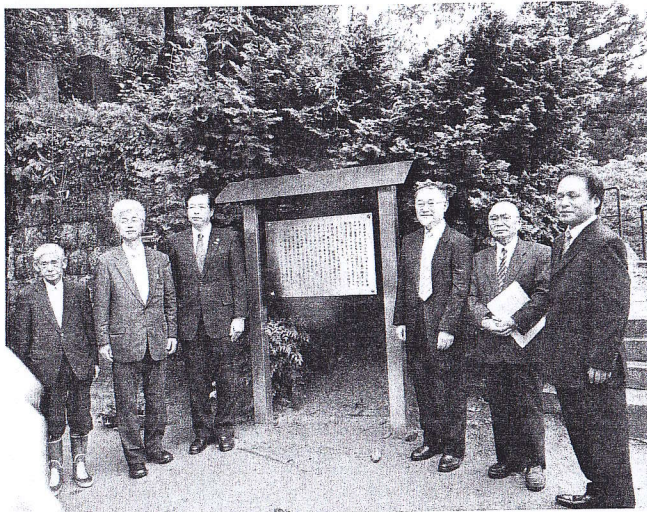


写真1 飯盛山白虎隊自刃の地説明板序幕後

このとき掲載された新聞記事には「白虎隊の義」刻む。落城誤認説退けるという見出しが付いた。記事作成に当たった記者に感謝している。

説明板は自刃の地の一番奥にあり、立ち寄る人が多いとはいえない。しかし、これを見てネットに記事を投稿する人も現れているので、理解が広まる。一里塚になると確信している。

(二) 白虎隊の辿った道彫刻石の設置

白虎隊については、飯盛山自刃の悲劇ばかりがクローズアップされ、どのような気持ちで出陣し、戦場でどのように戦い、なぜ自刃に至ったか、については殆ど知られていない。特に、武士の自分を明らかにするため自刃したことを理解するためには、これらの経緯についても明らかにする必要がある。

しかし、これらについては詳細不明の部分も多く、歴史の再研究が必要であった。

幸いにも、歴史研究家の石田明夫氏が、地道な調査研究を推進しており（文献13）、同氏の協力を得て、白虎隊の全貌を明らかにし、これを史跡として残す事業に着手した。

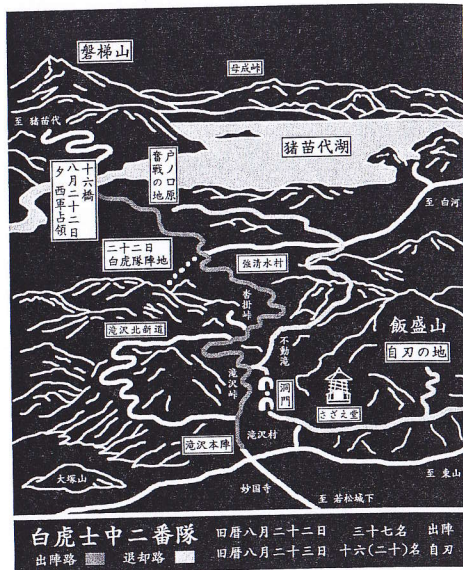


図3 白虎隊が辿った道案内図



写真2 「白虎隊が辿った道」彫刻石

白虎士中二番隊三十七名は慶応四年（一八六八）八月二十二日の昼ごろに鶴ヶ城を出立し、藩主護衛隊として滝沢本陣に出陣。ここで十六橋に迫る敵軍を阻止するべく援軍要請を受け、藩侯の命令により戸ノ口原方面へ進軍し、孤土山で一泊を露営。

新式銃で武装した敵約三千に対して、味方約七百、内、西洋式軍事訓練を受けた正規軍は白虎隊のみという超ハンデキヤップがあることも知られぬ状況で、二十三日早朝、果敢に敵軍と交戦し撤退。約半数が飯盛山に至って、全員自刃した。

平成二十四年に、白虎隊が辿った道の案内図を作成することにした。設置場所としては、飯盛山の正面左手にある戸ノ口洞門としたが、問題となったのは、景観・美観である。多くの観光客が訪問するこの地にふさわしい「かたち」が求められた。

彫刻石のアイデアは真部正美氏から出され、黒みかげ石に直接「白虎隊が辿った道」の図を彫りこむことで、現地関係者の賛同を得ることができた。

行きと帰りの道、磐梯山の形状、猪苗代湖との位置関係、説明文など細部の調整も行われ、図3が完成した。

平成二十四年九月二十二日に、飯盛山にある戸ノ口洞門に

「白虎隊の辿った道」彫刻石を設置して、序幕した。これは、白虎隊が戸ノ口原に出陣し、その後、退却して飯盛山に至った経路を分かりやすく表示するのが目的である。

(三) 白虎隊戦闘の地説明板の設置

白虎隊が出陣し、飯盛山で集団自刃するまでは僅か一日の出来事であった。彼らはどこでどのように戦ったのだろうか？

戸ノ口原古戦場跡に「白虎隊奮戦の地」の巨大モニユメントがある。明治三十三年（一九〇〇）に設置されたものであるが、これは史実なのか？

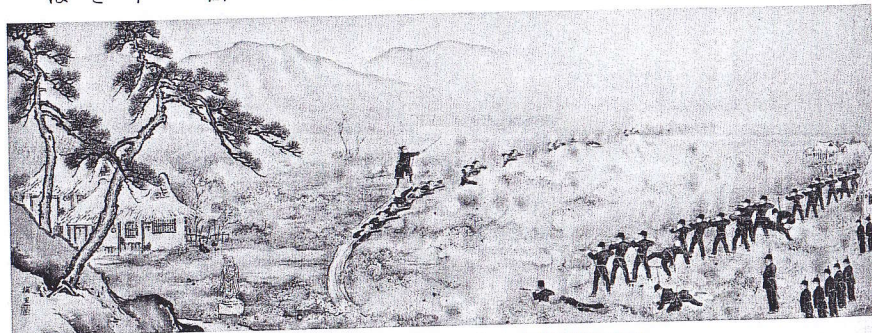


図4 飯沼貞雄が描かせた白虎隊奮戦の図

白虎隊の戦闘経緯については、これまで詳細が分からないままになっていた。

石田明夫氏および井上昌威氏（会津歴史研究会）に現地調査を依頼した。石田氏は暫壕跡の調査、井上氏は現地の聞き取り調査を中心に進め、これに飯沼貞雄が残した「白虎隊奮戦の図」と「白虎隊顛末記」、その他の資料と関連付けて調査を進めた。その結果、戦闘の地は戸ノ口原古戦場跡から西に1kmほど離れた、新四郎堀付近であろうとの結論を得た。

ここで重要な手がかりとなったのが奮戦の図に描かれた「溝」であり、「白虎隊士の潜伏したる溝内は其の幅約五、六尺、前面堤防の高さ約二尺乃至三尺位なる」という顛末記の記述であった。

石田氏は、この溝について、下記のように結論づけている。

白虎隊が潜伏した溝は、基盤整備によって、当時と異なっているため現在では確認できないが、国道北側にある溜池に注いでいた溝のようで、国道四十九号南側の水田部分である。

三か所に設置し、前夜露営した菰土山付近に、白虎隊露営地説明板を設置した。

四 白虎隊士生家跡の整備

白虎隊士はどこでどのように召集され、どんな気持ちで出陣したのか？

白虎隊が誕生したのは、会津藩の軍政改革の時で、直ちに、鉄砲を装備した軍事訓練が開始された。指導に当たったのは幕臣畠山五郎七郎とされる。畠山は、江戸で幕府が招聘したフランス人シャノアンによる仏式の訓練を受け、会津に派遣された。

士中白虎隊の任務は藩侯の護衛であるが、寄合白虎隊は補充兵であった。

敵が迫ってくる中での白虎隊士の心境について、白虎隊顛末記は次のように記している。

茲に中隊長原早太の率いる寄合組白虎隊は、補充兵として出陣し、既に越後口石間の関門に於いて戦い、戦死者数名あり。其の負傷者皆九名後送せられ、若松の病院にて治療せり。然るに士中白虎隊士も同じ年齢の事として流石に哀憐の情黙止し難く、屢負傷者を病院に慰問し、親しく戦場の実況を



写真3 白虎隊戦闘の地説明板除幕式
強清水駐車場 2014年9月22日

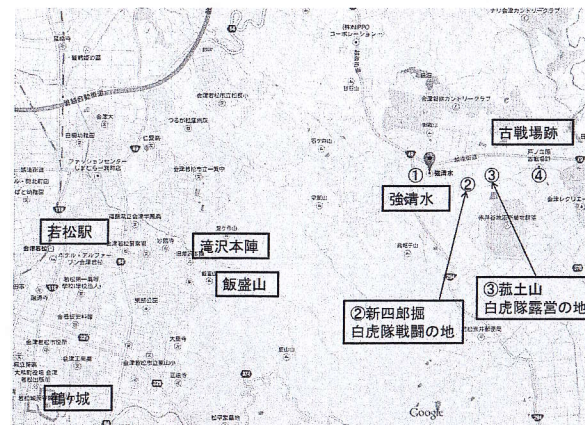


図5 戦闘の地説明板設置位置

以上の調査結果を踏まえて、地権者や若松市の了解を取り付けた上、二〇一四年九月二十二日に、若松市長らのご参加のもとで、説明板を序幕した。

白虎隊戦闘の地説明板の設置と序幕

説明板は、強清水駐車場、新四郎堀付近および古戦場跡の

聴き感慨一方ならず、且つ常に訓練を共にしたる寄合組白虎隊に後れたるとの感情を惹き起こし、今は血氣平生に倍加し、寸時も早く戦場に臨まんことを熱望せり。

白虎隊士中二番隊は一刻も早く、戦場に出て藩のために働きたかった。

そこで、八月初旬に会議を開き、自分たちの決意のほどを建議書にまとめて上申することにした。

提出先は白虎隊を管轄する学校奉行ではなく、日新館主宰にして軍事奉行を兼任する家老の萱野権兵衛とし、起草委員は井深茂太郎と石山虎之助、執筆は井深茂太郎である。井深が書き上げた「建議書」を、教導の篠田儀三郎と安達藤三郎が萱野権兵衛に提出した。

建議書の現代文訳を下記に示す。

儀三郎等、頓首再拝敬意を表し、書を国老閣下に提出いたします。今や我が藩強敵を四境に受け、守衛の兵士は専ら防戦に努めております。しかしながら、戦機一步誤って敵を境内に入れるような事になれば、城をも危険に晒す事態となるやもしれません。また、守衛にあたる兵士達は長く国境に在り、後援もなく苦戦を続け、心身共に疲労困憊しており、往時のように力を発揮できないのではないのでしょうか。そこで、

建議書も歌も、十六歳にして立派である。出陣の覚悟のほどが伝わってくる。

現在、会津若松市内に会津藩士屋敷の痕跡は殆ど残っていない。鶴ヶ城北出丸近くに、西郷邸跡と内藤邸跡があるが、白虎隊士生家跡はない。

そこで、召集令状を受けた白虎隊士の生家跡に石碑を設置し、これを起点として白虎隊ツアーを企画し、召集、出陣、戦闘、自刃に至る「白虎隊が辿った道」を体験させ、ならびに「ならぬことはならぬ」の会津魂・白虎隊の「義」を後世に伝えることを目的とした。このため、白虎隊の会として福島県に助成事業を申請した。

地域創生総合支援事業（サポート事業）とは、地域を元気にするために、住民が主役となり、民間団体や市町村等とともに連携して行う魅力ある地域づくりを支援する事業となっている。

白虎隊士生家跡が現在の市内地図上どこにあるかは判明しているが、石碑の設置には地権者の了解が必要で、一件一件の交渉を進めた。これまでに設置した生家跡碑は氏名、住所、地権者、設置時期の順に以下の通りである。

篠田儀三郎 米代一―四―三十 秋山建設㈱ 二〇一五年

井深茂太郎 城前三―二十一 東邦銀行㈱東邦寮 二〇一六年九月

篠田儀三郎生家跡碑序幕後の記念写真を下記に示す。
関係者多数の参加のもとに盛大に行われた。

この行事を紹介した新聞記事では、このような会津藩士の生家跡碑は会津若松市内にはこれまでは無かったとしている。

白虎隊自刃劇と白虎隊ツアー

序幕の後には出陣を前にした白虎隊士の思いを知っていたために、劇団びーひやららによる出陣劇を奉納していただいた。

その脚本の一部を以下に紹介する
作・佐藤 雅通・協力飯沼一元

出陣の建議と回章文、そして「ひきなかへしそ」

出演者・篠田儀三郎、飯沼貞吉、津川喜代美、井深茂太郎、池上新太郎、ふみ、藤太、日向内記、ナレーシヨン

津川喜代美の家にて。津川喜代美、池上新太郎、井深茂太郎、飯沼貞吉が車座になっている。ナレーシヨン（以下、ナレ）、登場。

ナレ 奥州街道から会津に入る道は次の五つ。一つ、白河・



写真4 白虎隊士篠田儀三郎生家跡碑序幕後の記念写真

九月

飯沼貞吉 西栄町一―八十二 (有)きくや生花店 二〇一五年九月

年九月

津川喜代美 米代一―三―三十一 福島県立若松商業高等

学校 二〇一六年九月

我々学生の身ではありませんが、彼らに替わり戦地へ赴き、平常訓練の技を試みて奮戦し、国家に殉ずる時かと存じます。先に学校奉行にお会いし、出陣の嘆願をいたしました。ただ何の命令も受けておりません。虚しく日々を送り、時を延ばして軍機を失えば、後悔に及びましょう。時機は逼迫しております。学校奉行の命を待つてはいられません。敢えて閣下に申し上げます。我々の志、どうかお汲み取りください。様、お願いいたします。頓首。 恐惶恐惶。

萱野権兵衛殿閣下

追伸 我々は出陣の方面を自ら選びはいたしません。只、君命を待つのにございます。しかしながら、敵兵の最も多い処、敵の士気が最も高い処への出陣を痛切に願っております。閣下が幸いにして(この建議書に)目を留めてくださり、我々の心情に憐憫を感じ、希望を容れていただけるならば、それほど喜ばしい事はございません。 再拝

また、白虎隊士津川喜代美は、出陣した朱雀隊の兄宛に手紙を出し、はなむけの歌を書き添えている。

かねてより 親の教えの時ばかり

今日の門出ぞ 我はうれしき

須賀川から勢至堂峠を越える。二つ、郡山から中山峠を越えて十六橋、戸ノ口に至る。三つ、御霊櫃峠を通って猪苗代南岸を回る。四つ、二本松から母成峠を越えて若松に入る。五つ、福島から土湯峠を越えて猪苗代に出る。

井深 西軍は中山峠を越えるつもりらしい。

津川 それは我らにとっては好都合。

飯沼 それはなぜです。

池上 あそこは会津の主力が守りを固めている。

井深 越後からは来るまい。敵の主力は奥州街道にある。

池上 おう、そうだ。それに南は旧幕府の伝習隊がいる。敵は中山峠を選ぶはずだ。

篠田儀三郎、入ってくる。

……中略……

篠田 みな、聞け。我らの死すべき時とは、我らの死によって、殿や会津を永遠に守ることができると断じる時だ。

一同 ……

篠田 武士の本分とは、軽々に命を捨てることではない。命の使い道を見出すことなのだ。そうは思わんか。

篠田 (調子を変えて) とは言え、毎日毎日、三の丸の溜所や各々の家に集まって悶々としていては、尻にカビが生えるな。

津川 では、どうする？

一同 (顔を見合わせる)

篠田 ご家老様に建議書をお届けしよう。起草はわが白虎隊

一番の秀才井深だな。

井深 よし、では、俺が建議書を書こう。儀三郎、萱野様のところへ出向いてくれるか。

一同 (篠田に注目)

篠田 ……分かった。

以下省略。

白虎隊が辿った道バスツアー

白虎隊が辿った道のバスツアーは、生家跡を回った後、鶴ヶ城鉄門→滝沢本陣→強清水で白虎隊戦闘の地説明板見学→新四郎堀→孤土山→戸ノ口原古戦場跡→飯盛山で解散となる二〜三時間のコースである。

バスの中で、義に生きた白虎隊という六十四ページかなる漫画本が配布され、白虎隊が辿った道の現地解説がこなわれる。

なお、現地解説の概要は下記の石田氏の寄稿文を参考にさせていただきたい。

一同 (笑う)

津川 せめて俺たちの会津を想う気持ちだけでも知っていたきたい。

池上 お殿様に直接申し上げるというのはどうだ。

井深 だめだ、それでは順序が違う。

一同 (納得)



写真5 劇団びーひゃららによる白虎隊出陣劇の様子

【戦闘前夜】

滝沢峠舟石茶屋に携帯品を預け、駆け足で進んだ。夕暮れとなり、強清水先の小山(孤土山)に登り胸壁を築く。会津藩の誠志隊は、戸ノ口原、強清水、大野原にすでに胸壁を築いていた。午後四時頃、薩摩兵(川村隊)は、日橋川の十六橋を渡り、西岸の戸ノ口に胸壁を築き、陣をなしていた。

白虎隊は、孤土山の陣を会津藩の敢死隊や新選組に譲り、約十丁進むと、五丁隔てた先には数千人の西軍(薩摩藩と土佐藩、指揮は板垣退助)がいた。午後四時頃、旧幕府兵十五人と敢死隊三十人が槍や和銃で突撃するが、射程約七百mのスナイドル銃で激しく撃たれる。

会津藩は秋雨の中、夜を徹して篝火を焚き強清水の東側丘陵に胸壁を築いた。総督は、佐川官兵衛であったが、二十二日の夜から滝沢本陣にいて二十三日の戦いでは現地には戻っていなかった。

白虎隊は、戸ノ口原に野陣(戸ノ口より少し戻り、奮戦地と孤土山の間)する。前日、会津藩の敢死隊と奇勝隊約百二十人は、十六橋を落とせなかったため笹山原(笹山原レク公園南)で土佐藩と対峙する。隊長の日向内記は、一ノ瀬要人の命で、二十二日夜十時頃、上強清水の荒井宅で小池繁次郎、小原信之助、佐藤駒之助、新選組の中島登と作戦会議をした後、隊に戻ろうとしたが、道に迷い合流できなかった。

白虎士中二番 教導篠田率いる隊の進路と退路

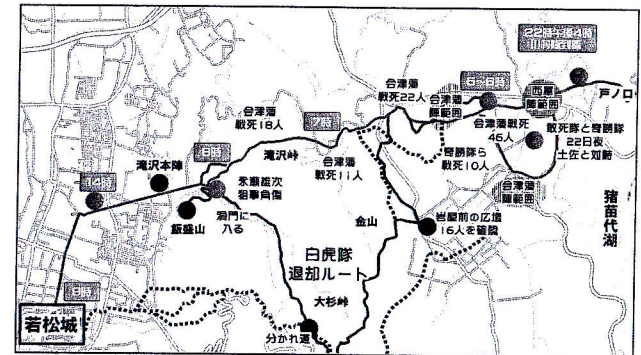


図6 白虎隊が進った道バスツアーコース

【戦闘開始】
二十三日、白虎隊は、討死を覚悟し、寝ることなく団練し、腰の食物を食べ明け方までいた。朝五時頃、日向隊長が戻らなかったため、篠田儀三郎が号令し、戸ノ口を目指し少し進むと銃声が近くに聞こえた。そこで、戸ノ口原の水の無い幅

六尺、高さ三尺の溝内に隠れる。西軍は、前日、戸ノ口で会津藩の遊撃隊、敢死隊、奇正隊を打ち破り、銃を撃ちながら街道を真直ぐ進んできた。西軍が百mに近づいた時、「撃て」と篠田が刀を振りかざし号令した。山内隊は、西軍を挟み撃ちしようと、赤井谷地西の新四郎堀に回って側射したが、効果はなかった。薄暗い朝六時頃、原田隊七人も新四郎堀より狙撃したが効果はなかった。その後、山内隊は、退軍の命により新四郎堀に身を隠していた。原田隊は、迂回し、白河街道に出て、滝沢峠の沓掛坂に向かうとするが、坂の下には敵兵がいて乱射するため東の赤井に回り、赤井山を登り、背炙りを目指した。

篠田隊は、兵をまとめ、前夜露営した場所まで退却した。敢死隊のいた上強清水まで戻ると、人影は無く戦死者がそこにもここにもあった。敵にじゅうりんされた一寒村の戦敗の痛ましい光景は、恨みを深くした。二十丁(約二キロ)、赤井の小坂まで退却し、ようやく敵から逃れると、銃声は遠くに聞こえるようになった。そこには、見上げるほどの地蔵がある芝生の広場で、点呼すると十六人になっていた。そこで、お握りを分け合って食べる。一方、酒井峰治は、穴切から穴切坂を下り小坂から西の山道に入ると、山内小隊長が後ろから来た。沓掛に向かうとし、進むと三方の分かれ道の金山に出た。

篠田隊は、背炙りで道に迷い、滝沢不動から滝沢峠入口近くに出ると、西軍に遭遇し、合言葉を掛けると、いきなり狙撃され、永瀬雄次が撃たれた。負傷者がいたことから飯盛山山頂へ行くことを諦め、戸ノ口堰洞門に入ったのである。

七、むすび

会津にとって白虎隊は鶴ヶ川と双壁をなす宝である。

鶴ヶ川は戊辰戦争で一ヶ月に及ぶ西軍の総攻撃に耐え、幾多の砲弾にまみれながらも落城しなかった。それは、会津は朝敵でも国賊でもないことを立証するためだった。

幕末の京都守護職時代に、他のどの藩にも増して、天皇に忠誠を尽くしたのは会津である。その証拠は孝明天皇から頂いた「宸翰」が示している。

松平容保は戊辰戦争が始まって会津入りするや、直ちに蟄居して、天皇に恭順の意を表した。これに対して、薩長を主体とする新政府軍は、恭順嘆願を握りつぶし、捏造した錦旗を掲げて、三万人もの軍隊で会津に攻め込んだのである。

こうした歴史的背景の中で、白虎隊は誕生し、堂々と戦い、潔く散った。

「子供だったから、城が落ちたと早とちりして、自刃した」という説明は、泉下の白虎隊士に対して、あまりにも失礼ではないか？

本稿で述べたように、彼らは「ならぬことはならぬ」の抗議の意思表示として、自刃したのである。このことは会津武士道を貫徹したことに他ならない。
このように整理して見直すことによって、会津にとって、白虎隊が鶴ヶ川と双壁をなす誇るべき宝となるのである。
最後に、姫路城はユネスコの世界文化遺産に登録されているが、その理由は建築物としての美しさが主な要因であろう。一方、鶴ヶ川と白虎隊は我が国の歴史の転換点において、義に生きる武士道を体現したものであり、貴重な文化遺産として後世に伝えていく必要がある。

今日、サムライジャパンが日本を象徴する言葉として、広く受け入れられている。その根底に会津武士道があることを会津人はもっと自信をもって発信していくべきではないだろうか？

参考文献

- 文献1「白虎隊の戦闘行動と自刃の決定プロセス」 飯沼一元、平成二十二年三月三日 会津人群像No.16 歴史春秋出版
- 文献2「白虎隊事蹟 飯沼貞雄君の事蹟」 中村謙 明治二十七年 河井源蔵編 国会図書館
- 文献3「飯沼貞雄談による白虎隊実歴談」 河北新報社 明治

四十三年六月二十七日、七月三日

文献4「おもい出すことども」飯沼一省 昭和三十五年四月
会津会報

文献5「札幌にいた白虎隊士 ―飯沼貞吉―」金山徳次
平成元年八月二十三日 限定出版

文献6「初期白虎隊自刃の図について」

川延安直 平成二十年三月三十日 福島県立
博物館紀要第二十二号

文献7「會津藩教育考」小川涉 昭和六年 マツノ書店(平
成十九年復刻)

文献8「歴史を紀行する」司馬遼太郎 昭和五十一年十月二
十五日 文春文庫

文献9 例えば「会津藩はなぜ朝敵か」星亮一 平成十四年
九月一日 ベスト新書

文献10「慶応三年十月の倒幕派と密勅」井上勲 昭和四十八
年十二月 学習院史学十号

文献11「王城の護衛者、加茂の水」司馬遼太郎 平成十九
年九月十四日 講談社

文献12「会津人の書く戊辰戦争」宮崎十三八 平成五年十一
月三十日 恒文社

文献13「会津の城」会津古戦場研究会 平成二十七年十一月
二十五日 (株)九八

平成二十八年度

先人顕彰各種祭典・慰霊祭への参列

四月二十三日(出)	長命寺、阿弥陀寺戊辰殉難者春季祭典
四月二十四日(日)	飯盛山白虎隊士春季祭典
五月一日(日)	奈与竹之碑前祭
五月三日(火)	土津神社春季大祭
五月四日(水)	松平家御廟お花まつり
五月十八日(水)	田中家城代家老および宣野父子顕彰供養会
五月十九日(木)	野口英世を讃える集い
六月五日(日)	房総半島会津藩士慰霊祭
六月九日(木)	町野主水家顕彰祭
六月十一日(出)	遠藤敬止翁碑前祭
八月二十一日(日)	中野竹子女史顕彰祭
九月九日(金)	長岡藩士殉節弔霊祭
九月九日(金)	秩父宮妃勢津子殿下重陽祭
九月十六日(金)	小田山忠霊堂慰霊祭
九月二十一日(水)	土津神社秋季大祭
九月二十二日(木)	佐川官兵衛顕彰碑前祭
九月二十三日(金)	長命寺、阿弥陀寺戊辰殉難者秋季祭典
九月二十四日(出)	飯盛山白虎隊士秋季祭典
十月十四日(金)	秋月倅次郎詩碑前祭
十月二十九日(出)	三浦半島会津藩士慰霊祭

